

新型コロナウイルス感染症に対する本学の今後の取り組みについて

令和3年6月4日 学長 青木治人

本学では、緊急事態宣言発令に伴い遠隔授業を主とした授業体制を取って来ましたが、6月9日以降は、一部対面授業を主とした授業形式とすることとしました。

このことについて、本学の基本的な考えを説明します。

令和3年4月25日に発出された緊急事態宣言は、6月20日まで再度延長されましたが、その規制は当初の内容からかなり緩和されています。

さらに言えば、昨年の一回目の緊急事態宣言以降、今年1月の二回目の緊急事態宣言では、対象・内容共に限定的となってきました。そして今回の第3回目の宣言でも規制の対象は狭まり、また内容も一部対象を除き、やや緩やかになっています。

本学が、政府、および東京都の緊急事態宣言の期間延長にもかかわらず、対面授業を一定部分再開するのは、何も緊急事態宣言の規制が、回が進むごとにだんだんと緩くなったとか、あるいは今回、再度延長しても、内容が緩くなっているから、という理由ではありません。また他大学では授業のかなりの部分において、対面授業が開始されているから、という理由でもありません。もちろんこれらの状況も考慮したことは否定しません。

本学が対面授業に踏み切った主たる理由は、本学の教育が目的と

する『生身の人間一人ひとりと接する』ことを使命とする人材の育成」において、対面授業が必要であり、本学の状況がそれを可能としていると考えるからです。

実習は勿論のこと、実習に関わる知識は、オンラインでは十分には伝わらないのです。化学や物理等の実験ならばバーチャルでも知識は得られ、また理解することも可能です。しかし、「生身の人」と接することに関する知識は、「生身の人」と接することでしか身につけません。つまり、オンラインでは不十分です。

本学は将来、ICT 技術を活用した教育法をさらに取り入れる方向で検討していますが、本学の教育の全てが ICT 技術でカバーできるとは考えていません。学生と教員とが対面で接する必要な場面が、必ずあるのです。そしてこの状況は新型コロナウイルス感染症下でも変わらないのです。

次に、現在の感染状況下でも限定的な対面授業が可能である、と言う点についてです。

本学は①学生と教職員の健康を守る、②如何なる環境下においても、学生に十分な教育を提供する、という二点を遂行することを使命と考えています。

ご承知の通り、本学は少数学生の大学です。学生、教職員が、危機意識を共有すれば感染防止に一致して取り組むことが出来る環境です。

キャンパス内で、多くの学生たちが、どこで何をしているか判り

づらいマンモス大学とは違って、本学はキャンパス内での行動に、自然と目が行き届く状況です。もちろん、これは決して“監視”とか、“自粛〇〇”と示しているわけではありません。

学生の皆さんが、感染防止策の意味を理解し、かつ自律的に行動することを信じているからです。

もちろん、今まで通りの対策で、今後も十分であるかと言うと、そうではありません。

感染力の強い変異株の増加、若年者の感染比率の増加、さらには感染経路不明者の増加等に対処するには、従来の感染防止策をさらに徹底するとともに、もう一段階厳しい防止策取らなければなりません。

具体的な対策は学務から詳しく説明があると思いますが、要は、①食事中以外の不織布マスクの正確な着用徹底、②アイ・ガード、またはフェイス・シールドとの併用、③食事中の会話の禁止、④マスクをしていても、言葉を発する人との距離は可及的に4～5m保つ（これは、感染の主体たる飛沫の到達距離1～2mに対し、極小飛沫、マイクロ・エアロゾルの到達距離4～5mを考慮した距離）、そして⑤換気の徹底、です。

なお、この「換気」に関しては大学が責任を持って実施します。

そうは言っても、通学時における、混雑した公共交通機関利用の際の感染リスクがあると思われる人もいるでしょう。

そのことは誰もが必ず感じる不安であって、本学はこの不安を無視するつもりは全くありません。

ここで一点確認しておきたい点があります。それは、通勤、通学等で混雑した公共交通機関を利用することが感染拡大のリスクであるという明確なエビデンスは今の処、ない、ということです。

ここで言うエビデンスとは、電車やバスに乗っている、文字通り、その乗車時間中に感染したかどうか、という点に関して、という意味であって、そもそもこの二つの事項の関係は、中々実態をつかみにくいのです。「乗車時間中」と言う、ある限られた時間内に感染したヒトがいるかどうかは、正確には把握できないのです。

もちろん、エビデンスがない、からと言って、混雑した電車やバスの感染リスクはゼロである、というつもりはありません。ましてや、「全く無関係である、というエビデンスがある」という訳でもありません。

正確に言えば、「明確な関係は証明されていない」ということだけです。

1回目の緊急事態宣言の頃とは異なり、最近では、混雑した電車等が感染リスクとしてはあまり高いとは思われなくなりました。

よく言われるその説明とは、①電車の中では皆喋らないで黙っている、②数分毎に駅に停車し、扉が開くので、短い時間間隔で換気がなされる、③しかも、通勤用の電車では扉の数が一車両当たり4、5、場合によっては6もあり、十分な換気が為される、という推論

です。

「人流の削減」は感染拡大防止のキーワードとして使われますが、問題はどのような人達の動きが増えると感染が拡大するのか、と言うことです。不特定多数の人々（目的も、行先も様々な）が、それぞれ移動し、その行った先で、また様々な行動を取る、これが感染拡大の最大の要因です。文字通り、「移動中」の時間内での感染リスクはさほど高くはないのです。

誤ったメッセージと受け取られない様に何度も繰り返しますが、通勤や通学の際の電車やバスは、混雑していても感染のリスクは全くない、と言うことではありません。

ただ、論理的に考えればリスクがあってもおかしくはないが、実際にはさほどではない、と言うことなのです。

もちろんこれには前提があります。常にマスクをした上で、電車、バスの中では①喋らない、②咳やくしゃみはもつてのほか、③車内でどこかに手を触れたら、後で必ず良く手洗いをする、④バスの場合は窓を開けられるので、窓をできるだけ大きく開けて、十分な換気をはかる、です。

以上のことから、本学は、これらの注意が十分に守られ、また地域内での感染者数が減少傾向にあるならば、電車やバスでの感染リスクを主たる理由として、対面授業を全面的に回避する、と言う方針は採らないこととします。

学内での感染防止策を徹底させ、また学外では学生の皆さんに行動を十分注意をしてもらい、感染リスクを最大限少なくした上で(ゼロにはなりません)、限定的とは言え、可能な限り対面授業を開始することにします。

大学に来て、友人とろくに話も出来ない、食事も黙って食べなければならない、と言った制限は、学生の皆さんにとって大きなストレスになるであろうことは重々承知しています。

しかし、今しばらくは、窮屈な生活を我慢して下さい。イライラや不安等、相談ごとは何でも教職員が受けます。

ワクチン接種が始まっていますが、人口全体の比率から言えば、接種済みの人はまだまだ一握りですし、接種したからと言って何でもできる、と言う訳ではないのです。

学生、教職員、一体となって、新型コロナ感染症によってもたらされた「教育の難局」、もっとはっきり言えば、「本学の難局」を乗り越えたいと考えています。

学生の皆さんが、自らが置かれている現状を理解し、自律した行動を取られることを信じています。